



七
資
料
編

□資料 1 「尾張キリシタン史・史跡めぐりのしおり」

「二五八〇年代に入つて、花正のコンスタンチノが老衰のため、余り活躍が出来なくなつた頃、既に城下町清洲の武士層・町人層にもキリシタンが増えて、清洲を中心とするキリシタン伝道も盛況を呈し始めた。これは何よりも、尾張諸村の若い進取の気性に富むキリシタンの多くが清洲に出て、武士や町人に加わつた成果であると思われる。清洲は、一五八二年（天正十）の本能寺の変の後、信長の次男でキリシタンに大きな好意を持っていた、織田信雄が秘かに秀吉に対抗する勢力を育てていた町で、革新と復興の若い建設的意欲に溢れていた。一五九七年（慶長二）二月五日に長崎で殉教した日本二十六聖人の中には、尾張出身者が五名も名を連ねているが、その教養や進取性などから察すると、いずれも清洲のキリシタン信仰団の出身者ではないかと思われる。」（青山玄 「尾張キリシタン史・史跡めぐりのしおり」）

□資料 2 天正年間の宣教地 小牧「フタイベリ」

「二五八一年（天正九）秋から冬にかけて、巡察師の命令により、グレゴリオ・デ・セスベデス師が、日本人イルマン（パウロ修道士）とともに美濃・尾張地方を訪れ、宣教活動により多数の人がキリシタンとなつたとフロイスが伝える。『司祭たちはその地に十六日間滞在した。そこの人々の熱意と、信仰を得たいという真摯な願いには顕著なものがあつて、受洗者は百人を越えた。教会の建立に当てられた地所は、当地方で我らが有するもつとも美麗なもので、長さは二街区（間口二町）、幅は一街区（奥行一町）ほどもあり、全体が同じ状態を保ち、松、および高い樹木に囲まれ、その周囲には濠がめぐらされていた。降誕祭に先立って、かなりの長さ幅をもつた教会が建てられた。』（フロイス 『完訳フロイス日本史』10）

「フタイベリは、現在の小牧市二重堀とするのが定説となっている。同地は、以前は味岡村に属したが、尾張の鼻祖徳川義直を祀る靈廟、定光寺の文明永正年間（一四六九～一五二〇）の祠堂帖記録に『月浦大姉、六俵 二重堀』とあり、その頃の東禪寺は庵寺（「正銀庵」明応八（一四九九）～永正一四（一五一七）であった。天正十二年（一五八四）、小牧長久手合戦には、秀吉が小牧山の背後を狙う突出陣地を築いた地の一つとして有名である。」（瀧喜義「耶蘇会士の報告にみる尾張布教について」）

岐阜より七レグワあったとされ、現在考えられているのは七レグワ即ち約七里、二十八キロにある小牧市二重堀とされる。しかし、天正九年頃の布教地の跡を示すものは何も無い。現在二重堀にある東禪寺（号法雲山臨濟宗小牧市大字二重堀四七七番地）は、その創建を慶安二巳丑年（一六四八）開山荊州惠文大和尚（田楽の新徳寺二世）没年頃の寛永年間とされ、過去帳は寛文元年（一六六一）に遡ると言われている。セスペデスが布教した一五八一年より六十八年後で、小牧長久手の戦いで荒廃した二重堀には宣教師も来ることなくキリシタンは既に絶えていたと思われる。

□「資料 3 戦国武将田中吉政

戦国武将「田中吉政」については、岡崎城から筑後（九州）柳川城に移封した後の足跡を旅した書物がある。

「一般には、「自らは受洗せず、最後まで篤信の仏教徒であった」といわれて、彼がキリシタンではなかったとするのが通説であるが、著者の森氏は、田中吉政は秘密洗礼を受けた隠れキリシタンではないかと推測している。氏は柳川の真勝寺の床下に葬られている墓石を訪ね「一見ただけで、藩主の墓としてきわめて異型とわかった。文字も飾り彫りも一切ない。白い小さな直方体の石を置いただけ」ではあるが、上から墓石（戒名「桐巖道越大居士神儀」）

を見下して、頭頂部の四角錐の稜線がX形をつくっている。「アンドレア・クルス」を見たときそれに気づいたというのである。「己れの生の根拠である信仰を秘せねばならないことは吉政自身にとつて、まことに不本意でもあれば、心苦しいことでもあつたろう。彼は生涯の終りに臨んで、終生秘していた信仰をせめて墓の形に表わし、魂の故郷である柳川にとどめておきたいと希つたのではあるまいか。京都で客死した柳川藩主田中吉政の墓は、その最期の希いどおり、四百年後の今も、柳川の真勝寺の人びとに守られて本堂の床下の闇にひっそりとある。」(森禮子『キリシタン史の謎を歩く』)

□資料 4

「寛文元年(一六六一)辛丑三月一日 一、今月朔日、御旗本衆西尾権左衛門殿より以使者被申上げるは、私領分濃州しほかたびらと申す両在所に幾利支丹宗門の者共有之由承り候。拙者在江戸仕り、御存知之通小身に候得ば、領地に人鮮(スクナク)指置申候。乍恐御国(おくに)境(マ、禁力)之儀に而御座候間、御家中衆に被仰付、搦めさせ被下候はば、過分難有次第に御座候。且は御公儀を大事に奉存候間奉願候。私に而私ならざる故申上候との儀なり。殿様被為聞召、安きことなりと仰せられ、則御国奉行渡辺新左衛門・足輕大將田辺四郎左衛門、御代官衆に勝野太郎左衛門、御目付鳥居伝右衛門、五十人御目付衆一兩人、手代取手の者數十人、時刻を移さず馳参じ、搦捕るべき旨、被仰付、夜中に名古屋を出、未明にかしこに至り、能き手段をして幾利支丹共廿四人、忝人も不残搦捕、四日の夜つれ来る。又犬山の城下五郎丸といふ在所に、伴天連忝人有之、成瀬信濃守よりからめ出さる。其外にも美濃境に有之とて、搦めに遣はさる。十五日夜は五十九人搦来る由なり。其後も拾人二拾人方々より搦め来る由。幾十人とも、しかとは知れず。」(津田房勝『正事記』)

□資料 5 高山右近の金沢追放

「一行は六十の坂を越した右近を先頭に、夫人ジュリア、横山康玄に嫁したその娘、亡くなった長男ジョアンの孫たち五人。如庵も妻と四人の子、長男トマスの子四人。それに宇喜多久閑とその子三人であり、それに利長のつけた警固の武士たち、またあくまでつき従ってきた右近の家臣や下男・下女たちであった。おりしも冬の最中、北陸のけわしい山路は深い雪にうずもれており、老体、女、子供にとつて、その旅の苦しさは言語に絶するものがあつた。加賀藩の旧記『今枝直方悦草』によると、『護送責任者の篠原出羽守は、重罪人を護送する駕籠を自分の責任で排し、右近ほどの人物に対して、貴人の駕籠で帯刀のままにしようとした。しかし、右近は殿に相済まぬとそれらを拒否した。篠原は右近を必ずしも尊敬はしていなかったが、武人として右近の面目を重んじたのはさすが武士の情けを知るものだ」と評判されたと言う。』（海老沢有道 『高山右近』）

□資料 6 切支丹研究家としての森徳一郎

「森徳一郎氏は、一八八五年（明治十八）十一月二日、愛知県丹羽郡浅野村（現在一宮市大字浅野）に生まれ、若年二十六才の折、時の名古屋市長編纂委員堀田璋左右氏の影響を受けて郷土史研究を志し、それ以後ほとんどその一生を郷土文化の開拓に献身された。一九七二年（昭和四十七）四月九日八十七歳で逝去されました。森徳一郎氏はキリシタン史研究家であるばかりでなく、キリシタン史跡顕彰の啓蒙家でもあります。一九五〇年（昭和二十五）、火あぶりの跡と伝えられる一宮市常光町一本松塚に、殉教者の霊を慰めるため、氏の発意によって十字型の木製高札が建てられた。しかし、それは年を経て朽ちてしまったので、一九六七年（昭和四十二）には自然の河石をもって建立

されようとした。ところが、この殉教碑が区画整理のため建てられなくなり、氏は移転先の決まらぬ同碑をご自分の庭の奥地、浅野公園に面する一面に移して「なぐさめ塚」と名づけ、文献「尾濃切支丹慰め塚」を同殉教碑の説明書として出版された。」(伊藤秋男 「切支丹研究家としての森徳一郎氏」)

□資料 7 恵心庵の由来

「愛知県扶桑町大字桜木のこの恵心庵は、一六三二年(寛永八)と一六六一年〜一六六三年(寛文年間)とに、この高木村ならびにその近隣地域でキリシタンとして処刑された無数の村民の霊をとむらい、その冥福を祈るために、一六九九年(元禄十二)、当時の住人が一体の舟形石仏地藏尊(高さ二尺七寸で、『有縁無縁三界萬霊等』『丹羽郡高木村』の銘をもつ)を造って草庵を建てたことに端を発しており、草庵は、そこに恵心と称する尼僧が住んだところから「恵心庵」と呼ばれたという。恵心庵の裏手(西隣り)には村方で処刑されたキリシタンを葬った塚があり、それを含む当時の恵心庵境内は一反歩余りにも及んでいた。一九三八年(昭和十三)、恵心庵の北隣りに住む田島博道氏は、恵心庵境内入口に『切支丹史蹟地本尊地藏大菩薩恵心庵』と大書した石柱を建て、一九五二年(昭和二十七)四月、恵心庵の堂宇を修築拡張したが、これに先立つ一九五一年(昭和二十六)九月一日、恵心庵に近い白山前三六二沢木荻三郎氏所有の屋敷畑で発見された白骨遺体の発掘が、大阪朝日新聞社と中部日本新聞社の協力を得、南山大学人類学研究所の伊奈森太郎教授によってなされた。遺体は、お棺もなく、ひざまずいて首を切り落されたような姿勢で埋められていたという。南山大学の中山英司教授(医学博士)は、首の骨の一端にははつきりと残っている傷跡からもこれを斬首された殉教者の遺骨と断定したが、同年九月五日、岐阜カトリック教会主任神父らによるその慰霊祭が、恵心庵で挙行された。遺骨はしばらく岐阜のカトリック教会に安置された後、今は岐阜県巢南町の大平茂樹氏宅に保存

されている。恵心庵の近辺には、ほかにも溝に斬り込まれたキリシタの遺骨が、今尚地下数尺の深さに眠っていると考えられる。現存する木造瓦葺恵心庵の建坪は十一・二坪で、敷地六七坪の境内には芭蕉の句碑もあり、弘法大師を慕って祈りに集まる人のほか、キリシタン史跡をたずねて訪れる人も少なくない。一九七四年（昭和四十九）八月、遺跡恵心庵は、扶桑町指定文化財として認定された。（田島博 「恵心庵の由来」）

□資料 8 「田島博氏について」（青山玄神父論稿より）

「田島博氏は、一八九五年（明治二十八）に愛知県扶桑町高木村で田島博道氏の長男に生まれ、岐阜県師範学校を卒業して教員生活に入り、古知野南尋常小学校校長を最後に教職を退かれたそうである。その後は犬山信用銀行の設立に協力し、扶桑・古知野支店長を勤めたりなされたが、若い時から俳句をよくしておられたので、晩年には乾城吟社同人として、悠々自適の生活をしておられた。一九七四年（昭和四十九）三月に高木村のキリシタン処刑地として有名な恵心庵（敷地六十七坪と平屋瓦葺きの建物十一・二坪）の扶桑町文化財指定申請書を提出して認可を受け、その後恵心庵の整備と管理にも努められた。」（青山玄 「田島博氏について」）

□資料 9 犬山城主成瀬隼人正正親と犬山のキリシタン

成瀬隼人正正親は、家督を継いだ後一年三ヶ月の、一六六一年（寛文元）に、犬山城属の采配地、犬山郊外五郎丸村でのキリシタン事件に遭遇し、深く心を痛めたて心痛苦慮した。かねて美濃加茂郡帷子村と犬山にキリシタン宗徒が潜んでいることが発覚してのあることを探知して、尾張藩の手に依り一勢検拳の手が伸びたのであった。三月三日に男三人と女三人を召捕られたのを皮切りに、一六六七年（寛文七）十月六日までに、百二十四人が捕縛され、内赦

免が二十四人、すなわち百人の殉教者が名古屋千本松原（現橘町榮國寺）で処刑された。伝道所代わりに使われた真言宗満願寺は廢寺とされ、その後中村家先祖が移り住んだ。中村家は代々橋爪村の庄屋を勤め、屋敷内の先祖「顕彰碑」は、キリシタン迫害の歴史を伝え、宗門切支丹調書を記録している。

□資料 10 岩崎村の庄屋兼松七左衛門

「最近の兼松家系譜の調査によれば、岩崎兼松初代源藏正勝が慶安年中岩崎村に土着して以来の屋敷、そして一七九四年（寛政六）に生まれ一八五四年（嘉永七）に歿した八代目兼松七左衛門が当時居住していた屋敷地の場所は、現在「キリシタン屋敷」と云われる所、現在の小牧市大字岩崎一二四二番地である。ここに居住していたことが、兼松家十三代目子孫が所有していた「岩崎村家並絵図面」（一八四四年（天保十五）兼松七左衛門作成）で初めて確認できた。兼松家は江戸時代初期より絶えることなくここに住み、五代目七左衛門より五代庄屋を勤めていた。先祖は修理亮正吉の時代織田信長に仕え八百石を知行し徳川家康、尾張義直に仕えていた尾張藩士の武門であったが、岩崎村に移り住んでは帰農して代々庄屋格の家柄であった。

兼松源藏正勝の父正成（一五六三年（永祿六）～一六四〇四年（寛永十七）九月二十三日歿七十八歳）は、江南のリシタン大名前野将右衛門長康より一五八五年（天正十三）三百石の知行を受けた家臣であったが、一五八七年（天正十五）秀吉の禁令で長康が棄教。その後一六三五年（寛永十二）十一月二十一日、尾張藩江戸屋敷において、兼松源兵衛正成、南部安右衛門が江戸城へ召し寄せられ徳川將軍より尾張藩内における切支丹の吟味を入念にするよう申付けられている記録がある。一六六三年～一六六七年（寛文三～七）にかけて岩崎村で起こったキリシタン宗徒捕縛事件では、当時尾張北部の各地から農地開発労力として集められた農民が多くいた。その中にキリシタン宗徒がいた

かもしれない。キリシタン捕縛事件は兼松家一族の中で忘れられることなく兼松家八代目七左衛門が天保年間キリシタン宗徒の遺徳を偲び燈籠を設けたと思われる。この岩崎の灯籠とよく似た形式の灯籠として記述されている岡崎法蔵寺の灯籠は奥庭の露地にある。一八三七年（天保九）の銘があり、おそらく岩崎の灯籠の製作年代も同じ頃と推定できる。」（栗木英次「岩崎村の庄屋兼松七左衛門」）

□資料 11 犬山藩領主成瀬正虎とキリシタン

「丹羽葉栗両郡のキリシタン出候村々が、犬山の成瀬氏の所領か、その御鷹場の内に属していることも注目されている。下般若村も、新田が蔵入地であるが、犬山藩領である。御鷹場は木津から石枕川、般若川、五条川、青木川などの用水添いに、南は生田橋、北島、伝法寺、浅野に至る丹羽郡全域に及び、小折村生駒領と時之島阿部領が除かれる地域で、各村々は魚鳥運上金を犬山藩にさしだしたて、その利用を許されている。犬山藩は、小物成運上を通じてこれらの村々に行政支配の深い結びつきをもっていた。二代藩主正虎公は洗礼名を持つキリシタンであった、と当主十二代正敏氏も明言されているが、その庇護に浴するか否かは別として、出候村々がその鷹場の中に含まれ、巡見街道、柳街道沿いである。」（瀧喜義「江南地方のキリシタン関係資料」）

□資料 12 栄國寺由来

「栄國寺の西にある日置神社に織田信長が桶狭間で今川義元との合戦に出陣の途中必勝を祈願し（一五六〇年）戦勝した御礼に千本の松を寄進したことにより、千本松原と称し、その後、刑場であったが二代藩主、徳川光友この地を栄えさせるべく刑場を西春日井土器野に移し慰霊のため清涼庵の一字を建て、更に藩主は中村座、のちの橘座はじ

め、多くの芝居小屋をつくらせ古物を取り扱う道具屋を住ませた。江戸時代は古袖町と云い明治になり、東橋町と改められた。現在の橋小学校の発祥地は栄國寺内でもある。」

栄國寺のある本町筋は一六六四年（寛文四）十一月五日開発、本町裏のこの栄國寺筋は、一六六五年（寛文五）九月に開発された。刑死者の菩提を弔うために、はじめ一六六五年（寛文五）三月に清涼庵と号し、のち一六八六年（貞享三）栄國寺（一七一五年（正徳五）五月山号を清涼山に改める）となった。丹羽郡塔之地の薬師寺本尊（高さ六尺正統派平安時代春日の作と伝えられる）にあつた阿弥陀如来坐像（市指定文化財）を祀る。処刑者慰霊のため藩主光友の命により一六六五年（寛文五）に塔之地より移された当時の様子は『尾張名陽図会』に描き残されている。境内にある「キリシタン塚」には、一六四九年（慶安二）町岡新兵衛が建立した石造供養碑があり「南無阿弥陀仏三界萬霊等」と銘記されている。（『東橋町史』）

□資料 13 キリシタン灯籠と織部灯籠

織部灯籠の中で「キリシタン灯籠」といわれるものは、織部流茶道の祖である古田織部が、一五七三年〜九二年（天正年間）のキリシタン全盛時代に、信徒や茶人の好みに合うように創案したものといわれ、一五四九年（天文十八）にキリスト教が伝来するまでは、この形式の灯籠はなかった。特徴は、竿石がラテン十字型で土中にいけ込みになっており、竿石の正面下部はキリスト像が彫られている。更に上部には神（父・子・聖霊）を現す記号がある。この灯籠がキリシタンによって崇敬の対象として用いられた場合、キリシタン灯籠といわれる。

□資料 14 知多市佐布里（そり）と尾張藩主光友

知多市大字佐布里字地蔵脇、正法院境内の誕生堂にある織部灯籠はキリシタン灯籠ではないかという説がある。この誕生堂は真言宗如意寺の塔頭であり、住職によると、この灯籠は昭和初期に同寺に持ち込まれたもの。また、かつては佐布里のどこかにあり、明治末に地区内から集められた墓石が如意寺西側のがけ付近にいったん置かれたものの、戦後すぐに現在の場所に移されたという。正法院の南方奥に如意寺（雨宝山正法院は旧号を如意寺と号した）がある。その昔、二代目尾張藩主徳川光友が参詣した記録が今に伝わっている。

「佐布里村に在る雨宝山如意寺の延命地蔵菩薩は靈験あらたかな地蔵様であるとの評判で知られていた。このことは横須賀に御殿を造つてたびたびお越しになつていた、二代目の殿様光友のお耳にはいり、延宝六年牛の年（一六七八）八月二十一日お午の刻に如意寺にお出でになりお参りなされた。お氣に召したのか夕方近くまでお寺で過ごされた殿様はご機嫌よくお帰りであつた。」

徳川光友は初代藩主義直の第一子として、寛永二年（一六二五）七月名古屋で生まれている。幼名を蔵入また五郎八という。母の名は於丈。九歳のとき三代將軍家光に拝謁し、この年の暮に元服して名を光義、後に光友と改めている。一六三九年（寛永十六）に將軍家光の一女千代姫を妻に迎えた。一六五〇年（慶安三）義直歿して二代藩主となる。光友二十六歳のことであつた。光友が横須賀に御殿を造営したのは一六六五年（寛文五）のことで、翌年の六月に初めてここを訪れている。この地に御殿（臨江亭）を建てた理由は、病氣保養のためとか海水浴のためなどといわれている。『編年大略附録』には、光友の横須賀滞在について「寛文六年丙午より始まり元禄三年庚午に至る。二十五年の間、渡御十三年也、惣回合わせて二十九度也」とある（伊藤昭正『古文書と絵図の語る一村と人々』）。

□資料 15 江戸時代の漂流民「音吉」

「尾張国知多郡小野浦村の樋口重右衛門を船頭とした千五百石積の尾張回船・宝順丸が、志州鳥羽浦を出帆したのが、一八三二年（天保三）十月十一日、江戸に向う途中、遠州灘で難破して一年二ヶ月後にアメリカ西海岸に漂着、十四名の乗組員のうち、音吉・岩吉・久吉の三名だけが生き残る。当時十四歳だった音吉は、その後イギリスの商船会社によって、英国経由でマカオに連れてこられた。マカオ時代には初の和訳聖書の完成に協力し、日英交渉にも英国側の通訳として尽力した。アメリカの船で日本に帰国を試みるが、異国船打払令による砲撃を受けて引き返し、望郷の思いを抱いたまま一八六七年シンガポールで死去し、現地で葬られた。二〇〇五年二月、シンガポールに音吉の遺灰を引き取りに行った斎藤宏一美浜町長を団長とする町民団一行が、乗組員十四名の墓のある良参寺に遺灰を納骨、音吉の百七十三年ぶりの帰郷となった。音吉の無念の生涯は、作家三浦綾子氏の小説『海嶺（かいらい）』に詳しい。海嶺とは、大海底に聳える山脈のこと。人目にふれずとも海底で厳然と聳える山は、人目にふれない庶民の生きざまに似ているところからつけられている。米国商船の協力でマカオから帰国を試みたが、鎖国政策の前に浦賀と鹿児島沖で砲撃に遭って断念した出来事は、一八三七年のモリソン号事件である。また、音吉はマカオでドイツ人宣教師チャールズ・ギュッラフに協力して聖書の翻訳を完成させた。」（音吉の菩提寺・良参寺入口の案内板より）

□資料 16 【新田】

「可兒町塩甘露寺の東約二反歩の地積を新田又は切支丹屋敷といい、切支丹信徒の住居地で、その子孫七才以下をこの地に小屋掛して養育しました、（年代は詳らかではありません）これは子孫に対し転切支丹として、仏教徒に転向させるよう、隣接地に甘露寺（別名を転び切支丹寺）を庵之洞より移転させて仏教に帰依させるような方策が講ぜられ

た物と推察されます。この地は明治二十年頃まで続き、村の差別により、転出やむなきに至り、この後は姿を消したわけです。」(奥村智咲 『切支丹の迫害史』)

□資料 17 【硯石】

「役人の手によって調書が作成され、住所、氏名が調書にのせられました。この時墨は高さ約二尺七寸ほどの自然石の一面を長さ約一尺、巾四寸程の凹に打割って硯の形として墨を硯って使用せられました。この石を硯石といいますが、一九五二年(昭和二十七年)五月塩組において、甘露寺境内石碑整理の祭、硯石の所在地地主可児町坂戸山口新太郎氏の篤志により、塩組へ寄贈をうけ、組中一同の奉仕により新田(旧切支丹屋敷の地)に移石、永久に硯石の保存が講ぜられました。」(奥村智咲 『切支丹の迫害史』)

□資料 18 福井及び富山の類族について

① 宝暦四年(一七六二)の丸岡藩村方覚に、丸岡に類族安達道祐があつたと記され、一七八九年寛政元年(一七八九)の廻国問答に「狩野九郎次郎一家よりキリシタン現れる」とある。禁令が出てから百数十年を経てまだキリシタンが生存したことになる。

② 寛政元年(一七八九)に、「福井藩の家中絵師の狩野永玄・奈須洞雪、町医師田代養哲・奥田秀的は類族なり」と廻国問答にあつた。福井藩や県内の諸藩では厳罰にした記録がないから、比較的寛容であつたようである。

③ 慶長十九年(一六一四)、徳川家康の切支丹禁教令により、加賀藩は、寛永七年(一六三〇)頃から、加越能三州に寺受「宗門改め」をし、キリシタン禁制に備えたため、越中の信者たちは厳しい禁教令の施行で殆ど棄

教していったといわれる。

④ 富山における類族の記録として、寛保四年（一七四四）二月四日、越中八尾町医者切支丹末類、摩嶋有教の病死に伴う藩役の検視について『御用留長内山文書』には、塩詰め土葬されたとある。類族が死亡した時には取り扱いが面倒で、町年寄り以下の町役人が連署の書類を作成し、町奉行所に届け出て、死体は塩詰めにして藩役が立ち会いのうえ土葬にした。火葬は許されなかった。

⑤ 高岡市鴨島町類族長兵衛一家、および片原町玄丹一家の名が記録にとどめられている。

⑥ 最近の資料（北日本新聞一九九七年（平成五）六月九日付）として、氷見市で発見された古文書（転び切支丹と言われ、改宗後も厳しく監視されていた一族の一人が死亡したことにより、宗門改奉行の検視を願い出た手紙）によれば元禄五年（一六九二）八月六日付で、切支丹として射水郡日名田村（現在の氷見市日名田）の一向宗長福寺に預けられていた鈴木半右工門の子息、市助が八月二十八日五十四歳で病死したため、遺体を桶に入れて塩漬けにし、長福寺に預けてあるなどとされている。

□資料 19 尾張北部のキリシタン大検拳事件

「尾張北部に伝播した切支丹は、地の利を得て可児郡西南部から郡内に布教を広げ、就中、塩、帷子がその中心となっていました。一六三一年（寛永八）尾張北部に大検拳があつてから、四年後の一六三五年（寛永十二）には『御代官井上角右衛門様、鈴木佐治衛門様の節、塩村より吉利支丹大分出申候に付、御討遊ばされ候』（寛永、正保、慶安時代中切村庄屋手控帳）、とあり、島原の叛乱後に当地にも迫害の手が伸び、多数の教徒の受難が認められます。『一六五〇年（慶安二）塩村より大分切支丹出申候に付、御代官様杉浦弾右衛門様お討遊ばされ候、段々御代官様お替り毎に、

お討遊ばされ候、帷子郷にも内々これあり候へば、切支丹御吟味遊ばされ候事』一六六一年（寛文元）四月、濃州可兒郡塩村の領主御旗本林権左衛門より、尾張藩宛の書状に『私領分、濃州可兒郡塩村並び帷子と申兩在所に、切支丹これあり候由承り候。拙者、江戸にありご存知の通りの小身に候はば、領地に人少なく指置申候、恐れながら、御国境の儀にて程近く御座候間、御家中衆にも仰せ付け、搦めさせ下しなされ候はば、過分にありがたき次第に存じ奉り候』右文面の書状をうけとつた尾張藩では『奉行渡辺新左衛門、足輕大將田辺四郎左衛門、代官勝野太郎左衛門、目付鳥居伝右衛門等五十余人、捕方數十人、未明に塩村に出張し、御用提灯、十手のひらめき、捕縄入乱れ、一類二四人を捕縛する』（濃飛両国通史）。一六九八年（元禄十）、濃州可兒郡塩村、帷子の切支丹三十五、六人笠松にて斬罪（尾濃葉栗見聞録）。また濃飛両国通史には『元禄十年可兒郡塩村の百姓切支丹という者吟味の上、笠松にてお仕置きあり、大字須（だいす、デウス）の餘類三十五、六人、木曾川通り笠松の下に埋めて塚を築く、今尚ダイウス塚としてしるしの松あり、里人伝えて切支丹宗門の輩と斬罪にせし旧跡なりと、切支丹の者多く斬罪の節、歴々の人もありし由、みな悦んでうたれける由、この地笠松役所の刑場なり、可兒郡塩村はキリスト教の盛んな処の如し』（奥村智咲『切支丹の迫害史』）

□資料 20 鈴木孫左衛門の処刑

「このころ魚津に、鈴木孫左衛門（一説には孫右衛門）という役人かいた。ひそかにマリアの像を隠し、耶蘇教を信仰していた。孫左衛門は慈門の弟子で、慈門は高山南坊の高弟である。慈門は大和国に、孫左衛門は魚津郡代のもとで役人を勤めていた。魚津の浦は漁獲の利がよく、当時南蛮寺破却後は、耶蘇教徒や名士らは、北国から魚津へ）ぞくぞくやってきた。そして手を打って驚き、『ここは唐の【今浦】南洋の【ウン浦】に似ている。必ず海中に蜃あつ

て珠を産するだろう。永住して珠を探せば必ず得られるであろう。」と鈴木孫左衛門に伝えた。孫左衛門は日夜その珠を探すとともに、法を広めることに努力したので、たちまち多くの信者を得た。しかるに慈門が捕えられて処刑される時、孫左衛門が魚津にいることを自白したので、幕府はときの魚津郡代大音主馬厚用に命じてこれを捕えさせ、江戸に召しだして成敗した。孫左衛門の家族七人は、大音主馬の討手につかまり、吟味のうえ、ついに魚津のまちはずれ、諏訪明神の後ろ、田畑川の東の地で、悲惨な刑に処せられた。その遺骸を一つの穴に埋めて、キリシタン塚、または『オテイテイカラの塚』（妻の名をオテイテイカラといった）と称し、そこに一寺を建立したが、今は跡かたもない。』（『魚津市史』 吉野旧記）

□資料 21 『三壺聞書』

『三壺聞書』には、「然るに寛永の初、鈴木孫左衛門は江戸定詰にて金沢より引越し罷越し、重ねて切支丹御吟味の時、孫左衛門内心はころぼざる由加州にて訴人有之、江戸より被召寄、魚津にて上下七人御成敗仰付らる。金沢に沢都と云う座頭夫婦、鈴木左衛門懇意也。其の外十人計処々より吉利支丹とて来り、泉野に座頭夫婦磔にかけ、残る者共首をはねて獄門に掛けさせられ、夫より此の宗旨の種は加州に絶えにけり。」という記述がある。中村松太郎はこれらの文書について注意すべき読み取り方を述べている。「鈴木孫左衛門の事件の記述は、わずか数行です。具体的な事実を知るには、読む人にとって不十分です。そこで恐らく半ば無意識的に、意識（字句にこだわらないで意のあるところを訳す）や、江戸期の文語体に翻訳も加わることでしょう。また特に伝説的記述や聞き書きなどにあつては、ことさら必然的に粉飾される事もあり得るでしょう」。伝説的なものを他の史実と付き合わせて検証し、各史料の記述の違いを読み解く必要性がある。（中村松太郎 『越中魚津キリシタン塚秘話』）

□資料 22 西光寺の「キリシタンきくの遺物」

この西光寺に「きくの遺品」が保管されている。中央に阿弥陀像を懸けた青銅製の十字架（西光寺の十字架は中央のユリ紋の円環が欠落している）である。これと同様の物を神言会青山玄神父は所持してしており、このような物のなかにはキリシタン遺物ではないものが多く出回っているので注意するように促している。「古風な十字架と阿弥陀像とを組み合わせ、古くみせかけていて造った鉄製の鋳物がある。一九五八年（昭和三十三年）に初めてこれを三重県上野市で発見した田北耕也氏は、一九六四年（昭和三十九年）ごろに愛知県美和町古道に住む林擁国氏である事を知ったとの事である。中央部に阿弥陀像を配合した鋳物である。」（青山玄「キリシタン遺物ではない十字架」）

□資料 23 カトリック名古屋教区センター内史料室

「キリシタン文化研究会会報には「終戦後間もない昭和二十六年頃、当時高岡近在で駅長をしていたカトリック信者の故川上金治氏が、三七〇〜八〇年前に高山右近、内藤如庵ら加賀藩キリシタン武将達の活躍地盤であった石川県志賀町・・」という記述がある。キリシタン研究家であった川上金治は、石川県志賀町火打谷の雲井家の蔵にあったキリシタン遺物を名古屋に移送した。名古屋教区平田義雄神父はそのコレクションを受け継ぎ、他のキリシタン遺物と共にカトリック名古屋教区区に寄贈した。寄贈されたキリシタン遺物は、名古屋教区センター二階「川上平田記念名古屋教区キリシタン史料室」に展示されている。

参考文献資料一覽(五〇音順)

- 愛知県文化財保存振興会 『郷土資料愛知の史跡と文化財』 泰文堂 一九六二年
- 青山玄 「田島博氏について」 名古屋キリシタン文化研究会会報』 35 一九八八年
- 青山玄 「金沢における高山右近の信仰生活」 カトリック金沢教会創立百周年記念講演 一九八八年
- 青山玄 「東海地方でのキリシタンの信仰生活」 キリシタン文化研究会報 93 一九八九年
- 青山玄 「日本文化史におけるキリシタン信仰の意義」 南山神学 18 一九九五年
- 青山玄 「フランシスコ・ザビエルの宣教の背後にある神学思想」
ヨーロッパ研究センター報 16 南山大学 二〇〇〇年
- 青山玄 「ザビエルの宣教活動の背後思想」 日本カトリック神学会誌 11 二〇〇七年
- 青山玄 「キリシタン時代と明治前期における美濃尾張伝道の性格」
名古屋キリシタン文化研究会会報 32 一九八六年
- 青山玄監修 『名古屋キリシタン文化研究会会報』 三巻合本 二〇〇〇年
- 安達隆一 『青山玄教授退任記念論文集 歴史・文化・言葉』 名古屋キリシタン文化研究会 一九九九年
- 家近良樹 『浦上キリシタン流配事件―キリスト教解禁への道』 吉川弘文館 一九九八年
- 一宮教育委員会 『一宮の石造遺物』 一宮教育委員会 一九八五年
- 一宮教育委員会 『一宮の文化財めぐり』 一宮教育委員会 一九七八年

- 伊藤昭正 『古文書と絵図の語る―村と人々』 知多市歴史民俗博物館 二〇〇二年
- 伊藤秋男 「切支丹研究家としての森徳一郎氏」 名古屋キリシタン文化研究会会報1 一九七二年
- 今村義孝 「禁教令の公布と宗門改め」 秋大史学18 秋田大学史学会 一九七一年
- 栄國寺切支丹遺跡博文館編 『切支丹遺蹟博物館の棗』 栄國寺切支丹遺跡博物館
- 江崎公朗 『山吹の歩み』 刊行会 一九六七年
- 海老沢有道 『切支丹史の研究 畝傍史学叢書』 畝傍書房 一九四二年
- 海老沢有道 『高山右近』 吉川弘文社 一九五八年
- 遠藤周作 『切支丹時代―殉教と棄教の歴史―』 小学館 一九九二年
- 大口町教育委員会 『郷土大口』 大口町教育委員会 一九六七年
- 奥村智咲 『切支丹の迫害史』 十五日会 一九五六年
- F・H・W・カステラン 『石川のキリシタン』 金沢聖霊病院 一九七三年
- 片岡弥吉 『高山右近大夫長房伝』 カトリック中央書院 一九三六年
- 片岡弥吉 『日本キリシタン殉教史』 時事通信社 一九七九年
- カトリック金沢教会 『高山右近から四百年 時のしるし』 創立百周年記念誌 一九八八年
- カトリック金沢教会 「金沢のキリシタン史跡・卯辰山の浦上キリシタン流配史跡」 二〇〇七年
- カトリック富山教会 『越中のからし種』 創立百周年記念誌 カトリック富山教会 一九九四年
- カトリック名古屋教区 『素顔の名古屋教区』 カトリック名古屋教区 一九六八年

- カトリック福井教会 『沖にこぎ出そう』 福井教会四十周年記念誌 カトリック福井教会 一九八八年
- カトリック福井教会 『共に生きる』 福井教会五十周年記念誌 カトリック福井教会 一九九八年
- 紙谷信夫 『カトリック名古屋教区の宣教前史 名古屋ハリスト正教会の沿革』 紙谷信夫 一九七九年
- 紙谷信雄 『魚津古今記・永鑑等史料』 桂書房 一九九五年
- 紙谷信夫 『風のふみごと―魚津歴史点描―』 新誠堂 二〇〇七年
- 鎌倉崇志 『コンスタンチノ 美和町史人物 一 美和町史編纂委員会 一九九五年
- 木越邦子 『『浦上キリシタン』の可能性のある金沢市御所町出土の人骨群について』
キリシタン文化研究会報 114 一九九九年
- 木越邦子 『キリシタンの記憶』 桂書房 二〇〇六年
- 栗木英次 『岩崎村の庄屋兼松七左衛門』 栗木英次 二〇〇七年
- 畔柳武司 『カトリック主税町教会の所見』 名古屋市文化財調査委員会
- 河野村誌編さん委員会 『河野村誌』 河野村 一九八四年
- 佐藤弥太郎 『春里・塩の切支丹』 美濃文化財研究会 一九六五年
- 柴田亮 『キリシタン宗門のものどうしの婚姻』 富士論叢 12 東京富士大学学術研究会 一九六七年
- 柴田亮 『橋爪村の類族の婚姻関係』 富士論叢 13 東京富士大学学術研究会 一九六八年
- 清水紘一 『寛文期尾張藩のキリシタン禁制について』 徳川林政史研究所 一九七八年
- 清水紘一 『キリシタン禁制史』 教育社 一九八一年

- 清水紘一 『織豊政権とキリシタン』 岩田書院 二〇〇一年
- 司馬遼太郎 『南蛮のみち I・II』 街道をゆく22・23 朝日新聞社 一九八四年
- 助野健太郎 『きりしたんの愛と死―その歴史と風土と―』 東出版株式会社 一九六七年
- 千田金作 『扶桑町の文化財第一集』 扶桑町教育委員会 一九七九年
- 千田金作 『尾張扶桑切支丹資料』 愛知県郷土資料刊行会 一九八七年
- 田北耕也 『キリシタン』 『日本文化史講座』4 明治書院 一九五八
- 田島博 『恵心庵の由来』 『名古屋キリシタン文化研究会会報』10 一九七五年
- 瀧喜義 『江南史料散歩 卷中』 マイタウン 一九八二年
- 瀧喜義 『前野文書が語る戦国史の展開』 マイタウン 一九八三年
- 瀧喜義・舟橋武志 『武功夜話のふるさと』 マイタウン 一九九二年
- 瀧喜義 『江南地方のキリシタン関係資料』 名古屋キリシタン文化研究会会報20 一九八〇年
- 瀧喜義 『耶穌会士の報告にみる尾張布教について』 名古屋キリシタン文化研究会会報38 一九八九年
- 棚町知弥 『白山万句 ―資料と研究―』 白山比咩神社 一九八五年
- フーベルト・チースリク 『キリシタンの心』 聖母の騎士社 一九九五年
- フーベルト・チースリク 『キリシタン史考』 聖母の騎士社 一九九五年
- 津田房勝 『正事記』 寛文五年 『名古屋叢書』23 随筆編 名古屋市教育委員会 一九六四年
- 長野カトリック教会 『信濃のキリシタン』 長野カトリック教会 一九六〇年

- 中村健之助 『宣教師ニコライとその時代』 講談社現代新書 二〇一一年
- 中村松太郎 『越中魚津キリシタン塚秘話』 新興出版社 一九八六年
- 南條郡教育会 『福井県南條郡誌』 臨川書店 一九八五年
- 西川孟 『殉教』 主婦の友社 一九八四年
- 西堀重雄 『曙光』 名古屋大気堂 一九八六年
- 丹生郡誌編集委員会 『福井県丹生郡誌』 丹生郡町村会 一九六〇年
- 林薫一 「尾張藩の刑場について」 徳川林政史研究所 一九七七年
- 春名徹 『につぼん音吉漂流記』 晶文社 一九七九年
- レオン・パジェス 『日本切支丹宗門史』 全3巻 岩波書店 一九三八年
- ルイス・フロイス 『完訳フロイス日本史』 全12巻 松田毅一・川崎桃太訳 中央文庫 二〇〇〇年
- 別府大学文化財研究所 『キリシタン大名の考古学』 思文閣出版 二〇〇九年
- 松浦武・松浦由紀 『武功夜話研究と三巻本翻刻』 おうふう 一九九五年
- 松田毅一 『南蛮のパテレン』 朝文社 一九九一年
- 松田毅一 『天正遣欧使節』 朝文社 一九九一年
- 松田毅一 『ヴァリニャノとキリシタン宗門』 朝文社 一九九二年
- 松田毅一 『慶長遣欧使節―徳川家康と南蛮人―』 朝文社 一九九二年
- 松田毅一 『豊臣秀吉と南蛮人』 朝文社 一九九二年

- 松田毅一 『南蛮遍路―フロイス研究回顧録―』 朝文社 一九九一年松田重雄
- 『切支丹燈籠の信仰』 恒文社 一九八八年
- 眞山光彌 『尾張名古屋のキリスト教・名古屋教会の草創期』 新教出版社 一九八六年
- 眞山光彌 「在日メソジスト・エピスコパル・ミッションの三河伝道事始」 愛知県立芸術大学紀要16 一九八七年
- 見瀬和雄 「日本語」加賀藩におけるキリシタン禁制の展開」 市史かなざわ 一九九五年
- 三俣俊二 『安土セミナリヨ』 カトリック滋賀県連合会 一九八〇年
- 三俣俊二 『信長と安土セミナリヨ』 東呉竹堂 一九九九年
- 三俣俊二 『金沢・大聖寺・富山に流された浦上キリシタン』 聖母の騎士社 二〇〇〇年
- 三俣俊二 『和歌山・名古屋に流された浦上キリシタン』 聖母の騎士社 二〇〇四年
- 美濃加茂市教育委員会社会教育課 『美濃加茂の石仏』 美濃加茂市教育委員会 一九八八年
- 森徳一郎 『尾濃切支丹年表、尾濃切支丹札所巡礼』 森徳一郎 一九三五年
- 森徳一郎・伊藤秋男 『キリシタン処刑反抗碑』 一宮史談会叢書 一九六六年
- 森徳一郎 『尾張切支丹なぐさめ塚』 一宮史談会 一九六九年
- 森山誠一 「金沢藩に預けられた浦上キリシタンの受難」 作成資料 二〇〇四年
- 森山誠一 「加越における浦上キリシタン流配事件の史実(続)」 金沢星稜大学論集第三七卷第一号 二〇〇三年
- 森禮子 『キリシタン史の謎を歩く』 教文館 二〇〇五年
- 横山住雄 『尾張と美濃のキリシタン』 中日出版 一九七九年

カトリック名古屋教区キリシタン史跡一覽

地図番号	史跡名称	内容	所在地
城北ブロック			
1	栄國寺史跡公園（殉教地）	尾張藩千本松原処刑場跡・切支丹塚 寛文7年キリシタン処刑地	名古屋市中区橋一丁目21・38
2	高田村処刑場跡	寛文7年キリシタン処刑地	名古屋市瑞穂区瑞穂町（滝子）
3	西掛所跡	浦上キリシタン流配地	名古屋市中区
4	五郎丸満願寺跡	キリシタン伝道所跡顕彰碑	犬山市大字五郎丸字満願寺13番地
5	岩崎山の切支丹灯籠	寛文年間切支丹史跡・慰霊碑	小牧市大字岩崎1335番地岩崎山
6	カトリック主税町教会	名古屋教区発祥・史跡教会	名古屋市東区主税町3・33
7	史跡犬山城・有楽苑	信長の弟長益有楽斎はキリシタン茶人	犬山市大字犬山字御門先
城東ブロック			
8	八事興正寺西山・埋葬地跡	浦上キリシタン流配配者埋葬地跡	名古屋市昭和区八事本町26
城南ブロック			
9	岩吉・久吉・音吉頌徳碑	史跡 和訳聖書出版頌徳碑	愛知県知多郡美浜町小野浦福島地区
10	如意寺塔頭誕生堂の石灯籠	史跡・織部型灯籠	知多佐布里地藏脇（正法院境内）
11	東浦町越境寺の切支丹灯籠	遺物・切支丹灯籠	愛知県知多郡東浦町緒川屋敷2区23番地

城西ブロック(仮称)

- 12 花正法光寺切支丹遺物
初期の伝道師コンスタンチノ供養塔
あま市美和花正字郷中66番地
- 13 尾張藩土器野処刑場跡
千本松原処刑場より寛文5年移設
清洲市新川町上河原6番地先

愛岐ブロック

- 14 甘露寺のキリシタン遺蹟
寛文の切支丹弾圧時の遺物「硯石」
可児市塩字新田
- 15 向田河原切支丹塚
キリシタン処刑地
可児市塩向田 1285の1
- 16 史跡七御前墓地
キリシタン遺蹟
可児郡御嵩町上之郷謡坂地内
- 17 「マリアの里」記念碑
キリシタン史蹟・顕彰地
可児郡御嵩町上之郷謡坂稲葉5247番地

濃尾ブロック

- 18 殉教者前野一族(吉田)邸
武功夜話のキリシタン前野家
江南市前野 657番地の2
- 19 江南市石枕共同墓地
切支丹松永久兵衛墓地
江南市石枕町神明
- 20 顕宝寺
1667年秋の処刑地
丹羽郡扶桑町大字南山名字高塚12・16番
- 21 熱田社・下般若地藏堂
1667年秋の処刑地
江南市下般若町東山
- 22 恵心庵(高木村キリシタン塚)
寛永・寛文年間の処刑地、顕彰石柱
丹羽郡扶桑町高木字桜木378番地
- 23 小渕薬師寺
ブチワリ不動・舟形地藏尊慰霊碑
丹羽郡扶桑町山名字堤南139番地
- 24 高雄覚王寺
キリシタン供養塔、舟形地藏尊
丹羽郡扶桑町高雄南屋敷乙135番地

- 25 柏森専修院
キリシタン処刑地
丹羽郡扶桑町柏森乙西屋敷62番64番
- 26 齋藤・正覚寺
キリシタン処刑地
丹羽郡扶桑町齋藤字県20番地
- 27 高雄長泉塚古墳
キリシタン処刑地、長泉院(教会)跡
丹羽郡扶桑町高雄字南新田中屋敷34
- 28 乱法山(ランポウ山)
キリシタン屋敷跡
丹羽郡扶桑町高雄字南定松郷72番地
- 29 一本松塚切支丹処刑場址
寛永8年キリシタン処刑地・慰霊碑
一宮市緑二丁目12番地
- 30 浅野公園なぐさめ塚
キリシタン顕彰碑
一宮市浅野
- 31 八剣社境内の遺物
空円上人碑後彫り銘文遺跡
一宮市大江町三丁目10・6
- 32 笠松善光寺・牢屋敷跡
陣屋・牢屋敷・処刑場跡
岐阜市笠松下新町42番地
- 33 大白塚(ダイウス塚)
笠松柳原刑場跡
岐阜県笠松町長池先(藤掛村嫁力淵)
- 34 井之上観音堂キリシタン石仏
キリシタン地藏尊石仏
江南市下般若町東山
- 北陸福井・石川・富山地区**
- 35 太郎右衛門島
キリシタン遺骨埋葬地
福井県南越前町糠(旧…南条郡河野村糠浦)
- 36 金沢卯辰山殉教者碑
浦上キリシタン流配記念碑
金沢市卯辰山地区
- 37 高山右近の史跡
高山右近像、遺跡南坊石
金沢市広坂一丁目1・54金沢教会
- 38 キリシタン武家屋敷跡
キリシタン藩士宅跡
金沢市尾山町7・3
- 39 伝承・傳燈寺遺蹟
キリシタン史蹟
金沢市伝燈寺町ハ・179

- 40 本行寺史跡
キリシタン史蹟
七尾市小島町りの 134
- 41 泉野桜木神社
座頭沢市夫婦磯刑場跡
金沢市泉野町三丁目15・14
- 42 長沢西光寺
浦上キリシタン収容所跡 長沢西光寺
富山市婦中町長沢 3933
- 43 長沢西光寺きく塚
きく塚・地藏尊、マリア像
富山市婦中町長沢鏡坂
- 44 鈴木家屋敷跡
浦上キリシタン収容所跡
富山市山王町 5・10カトリック富山教会
- 45 キリシタン塚跡(オテイテイカラ塚)
切支丹鈴木孫左衛門家族処刑地
魚津市本新町 751 魚津市釈迦堂 814番
- 46 第一の高山右近屋敷跡
現在の金沢21世紀美術館
金沢市広坂 1・2・1
- 47 西内惣構跡(尾山神社鳥居前)
高山右近が構築した浅野川に至る土居跡
金沢市尾山町 11・1
- 48 第二の高山右近屋敷跡
1602年頃この屋敷に移った
金沢市尾山町 10・2 文教会館隣ポスト前
- 49 教会跡・キリシタン武士らの住居跡
内藤徳庵、宇喜多久閑らの武士屋敷
金沢市尾山町 7・3 大谷廟所
- 50 大手門跡(大手堀)
慶長4年、前田戸利長が右近に修築させた
金沢市大手町 2・26
- 51 南蛮寺跡
利長の妹、豪姫のための教会
金沢市兼六元町
- 52 脇田直賢邸跡・キリシタン灯籠
宇喜多秀家が連れて来た直賢が作庭
金沢市小将町 8・3
- 53 東内惣構(小将町中学校そば)
藩主利長が高山右近に命じて掘らせた
金沢市小将町 1・15
- 54 西内惣構出口(主計町 緑水苑)
尾山神社近くを出発点とし浅野川への出口
金沢市尾張町 2・16
- 55 卯辰山の浦上キリシタン流配史跡案内
天神橋のキリシタン流配地の案内看板
金沢市金沢市末広町
- 56 能登の志賀町 西来寺
高山右近子孫伝承の里 菩提寺
石川県羽咋郡志賀町末吉